

奥氏系譜と二代元安

山下 廣幸

昭和六十二年度の当館企画特別展の一つは、「薩摩刀と島津家伝来の名刀」で、波平系を中心とした薩摩刀一、〇〇〇年の歴史の中で生まれた刀剣と島津家に伝来した名刀に薩摩の鐔、縁頭、目貫、小柄などの金工品及び薩摩拵を併せて展示したものであった。多くの所蔵者の協力によって多数の作品を展示できたが、これらの詳細については、特別展図録を参照していただきたい。

さて、薩摩刀の新々刀期を代表する刀工は、奥大和守元平と伊地知伯耆守正幸が、その双璧である。この元平が作成したと思われる系譜が戦前までは存在していたが、原本は戦火にあつて焼失し、現在はこの写本が残っている。本論で紹介する系譜は、坂元盛愛氏（当館専門委員）が所蔵されているもので、これも二代元平の四女キクが嫁いだ益山家に伝わっていたものの写本であるが、これによって奥氏の系譜を知ることができる。なお、元平以降については、後世の人が書き継いだものである。本論では、奥氏系譜を紹介すると共に、元平には元武、元安の弟があり、元武については系譜に詳しいが、末弟元安については詳しくふれていないので、現在までに知り得た資料によって考察してみたい。

まず、前述の特別展で展示した奥系の刀剣を、系譜の順に紹介すると次のとおりである。

国平

- 脇指…銘 薩州住平忠金作 長さ三八・〇cm 反り〇・七cm
 刀…銘 薩摩国住国平作 長さ八四・五cm 反り一・二cm
 享保九 二月吉日
 刀…銘 薩摩国住国平六十九歳造之 長さ七〇・九cm 反り一・八cm
 寛保三年八月吉日

- 薙刀…銘 薩州住国平行年八十一歳作之 長さ四二・二cm 反り二・三cm
 寶曆五年八月吉日

忠重

- 刀…銘 薩摩国住国平作 長さ八七・四cm 反り二・四cm
 刀…銘 奥和泉守忠重作 長さ七二・〇cm 反り一・九cm
 槍…銘 奥和泉守忠重作 長さ一三・八cm
 槍…銘 奥和泉守忠重作 長さ九・四cm

元貞

- 短刀…銘 薩州住平元貞 長さ一二・五cm 反りなし

元平

- 脇指…銘 薩陽土元平 長さ五七・九cm 反り一・二cm

天明二年寅八月

刀 銘 薩藩臣與元平 長さ七一・二 cm 反り二・八 cm

天明乙巳八月

刀 銘 薩藩臣與元平 長さ七八・一 cm 反り一・六 cm

天明六年二月日

脇指 銘 薩藩臣與元平 長さ五五・二 cm 反り一・〇 cm

天明六丙午八月

脇指 銘 薩藩與大和守平朝臣元平 長さ五五・四 cm 反り一・〇 cm

寛政二庚戌二月

刀 銘 奥大和守平朝臣元平 長さ七一・九 cm 反り一・三 cm

此刀為角元興鑄以傳鍛鍊之術 寛政五癸丑秋

刀 銘 奥大和守平朝臣元平 長さ七一・五 cm 反り一・八 cm

此刀為角元興鑄以傳鍛鍊之術 寛政五癸丑秋

刀 銘 奥大和守平朝臣元平 長さ八四・八 cm 反り二・四 cm

寛政八辰春

刀 銘 奥大和守元平 長さ七〇・〇 cm 反り三・〇 cm

寛政十午春

刀 銘 奥大和守平朝臣元平 長さ七二・二 cm 反り二・二 cm

文化十癸酉春 七十歳造之

短刀 銘 奥大和守平朝臣元平 長さ二九・九 cm 反り〇・四 cm

文化十癸酉 七十歳造之

槍 銘 奥大和守平朝臣元平 長さ一一・〇 cm

小刀 銘 奥大和守平朝臣元平 七十八歳 長さ二二・六 cm

元武

刀 銘 薩陽臣與元武 長さ七一・〇 cm 反り一・五 cm

天明七丁未八月

脇指 銘 薩陽臣與元武 長さ四八・二 cm 反り一・二 cm

寛政七卯春

短刀 銘 薩陽臣與元武 長さ二七・八 cm 反り〇・二 cm

文化十年癸酉三月吉日

元安

脇指 銘 薩陽士與元安 長さ四三・四 cm 反り〇・八 cm

文化十五寅春

短刀 銘 於大龍山與壽安入道平元安 七十六歳作之

武運長久 戊辰三月吉日 長さ三〇・二 cm 反り〇・二 cm

短刀 銘 薩陽士與元光 長さ二八・〇 cm 反り一・〇 cm

寛盛

刀 銘 薩州平寛盛 長さ七一・〇 cm 反り二・〇 cm

元全

短刀 銘 薩陽士與元全 弘化四申二月吉日 長さ二九・九 cm

祖先生業傳夢裡 鍛出吹毛秋夜霜 反り〇・四 cm

奥系の刀剣については、これら展示した作品のほかに福永酔劍著「図録 薩摩の刀と鐔」(昭和四十五年、雄山閣出版)、日本美術刀剣保存協会鹿兒島県支部の「薩摩刀名作集」(昭和四十五年)等に多くの押形や写真が掲載されており、「忠清」、忠重の別銘と言われる「秀興」等が紹介されている。

次に記載する奥氏系譜の元来の姿は不明であるが、現在の写本はB五

版より若干大きいもので、四四ページの冊子になっている。最初の四ページにわたって漢文で、奥氏の歴史を元平の代まで説明した序文があるが、これはおそらく当時の漢学者の手になるものと思われる。系譜は、初めて奥氏を称した忠重から始まり、元平の系統は昭和初期まで、元武の系統は現在までの記述があるが、本論では明治以降の部分について若干省略したところがある。

奥氏系譜

平姓

奥氏平姓谷山氏之分族也而其先系出于桓武帝之後
齋村岡五郎良文三世孫伊佐平次貞時始乎薩州領阿
多郡自是子孫蔓延分處諸邑各以其所領之地名為氏
焉曰阿多曰莫祢曰河邊曰給黎曰頼娃曰指宿曰知覽
曰別府曰谷山之類尚多矣而貞時五世孫曰忠明居加
世田別府邑因稱別府五郎忠明生三子其季曰信忠信
忠生忠光居谷山邑稱谷山兵衛尉是為谷山氏之分祖
忠光生木工介忠能忠能生五郎資忠為谷山郡司入道
號覺信資忠生左衛門尉隆信隆信生忠高稱左衛門尉
入道號佛心創建皇德寺世顯名士也而今以谷山氏者
皆莫不出其子孫也其後有左衛門尉忠正者不詳忠高
幾世孫然忠高而上諱皆連忠字忠正以降子々孫々亦
如此則其為旁支餘裔也可知矣忠正之六男長曰左衛
門尉忠受稱若松太郎次曰民部太夫忠直稱鮫島次郎

次曰式部卿忠友稱指宿三郎次曰兵部左衛門尉忠茂
稱知覽四郎次曰太夫判官忠國得谷山邑西二百町之
地居稱谷山五郎次曰兵衛尉忠重得邑東百五十町名
奧地居因以為氏乃建祖神廟於其地號奧權現自稱奧
六郎是為奧氏之始祖忠重九世孫為民部左衛門尉忠
光居日向州諸縣郡飯野邑而亂劇之世亡其譜故不詳
先世履歷及幾世祖某之時遷飯野邑忠光正文祿間
之人事松齡公有武名文祿之役從軍公戰歿於朝鮮國
其子忠助稱又左衛門亦從軍於朝鮮國有功忠助之孫
曰次郎兵衛忠清遷居隅州國分邑寬陽公之時命移覽
府遂為覽府人忠清自好為鍛冶造刀劍子孫相續造刀
劍有名世者今之家督孝左衛門元平忠清玄孫也亦能
繼先業造刀劍而其名最顯於是朝廷勅許朝臣號叙尉
大和守夫奧氏薩藩之旧族世顯名家也雖然先世譜牒
亡失不傳焉元平憂之常以製譜為勳矣旁搜廣索輯以
成編則持來徵余序且請改定余受而閱之自始祖忠重
以來傳世數十昭穆之次本支之別氣脉相承昭然有序
殆得古人作譜之法余喟然曰人家不可以無譜也譜所
以別其宗祖所自出示子孫所由系故反本探源莫先於
製譜蓋尊祖敬宗之大要仁人孝子之用心也世之人徒
快一己莫知本源祖父字諱墳墓迷失而罔聞族屬宗支
路遇而莫識憂喜情乖慶弔禮廢終至為秦越之視者無

松齡公は、島津義弘のこと

寬陽公は、島津光久のこと

他譜之不傳職是之由也甚矣譜之不可無也如斯乎今是譜之輯上可以鑑祖先忠孝之積於前已深下可以稽子孫福澤之享於後益遠是以尊祖敬宗而使子孫流芳於千載其用心可謂勤且厚也嗚呼與氏之為子孫其可不念哉因書以為序云

桓武帝之後裔村岡五郎良文之孫伊佐平次貞時五世別府五郎忠明末葉谷山兵衛尉忠光後胤左衛門尉忠正之男

●忠重

與六郎兵衛尉

忠重始領知谷山邑東百五十町名與地居之因以為氏自稱與六郎乃勸請伊佐權現谷山邑總社熊野三所權現也創建神廟於其地以為氏神號曰與權現

忠助 忠清

出羽守

忠景 忠秀

忠滿

忠親 忠俊

忠次 忠安

谷山太夫 四郎兵衛尉

忠光

民部左衛門尉

忠光初居隅州始羅郡蒲生邑後移居日州諸縣郡飯野邑奉事松齡公屢有武功

文祿三年甲午十月從慈眼公渡損朝鮮國勞軍事

慶長三年戊戌十一月有台命罷朝鮮師召還諸將時

明船手大將陣璘背和親約遣番船百餘艘塞港口小

西行長等諸將之在順天城者皆不得出松齡公父子

與立花宗茂等合軍救之十八日擊番船退之時忠光

奮戰斬敵數人遂戰死於亂軍中

重直 忠長

島 木工之丞

忠成

助左衛門

忠助

是助 又右衛門尉

(注) 始

文祿朝鮮之役從父忠光突戰其勇威無敢當者松齡
公感賞其勇銳曰若忠助之勇不可復有比倫即命稱
又右衛門讀曰麻多又復訓同俗
慶長三年戊戌十二月歸朝

忠次

子孫在大隅郡垂水郷

與七左衛門尉

重次

正左衛門

忠清

次郎兵衛

忠清移居隅州國分郷自好為鍛冶善造刀劍寬陽公
嘗如國分釣魚於海濱因命忠清造釣精工能協公意
乃召見忠清每釣魚使之侍舟中公之自國分歸也使
忠清侍舟中即命移居麿府因賜家宅及鍛冶舍於府
城西隣年間不傳十二又賜圈中交午十二劍家紋
寬永元年甲申九月十六日死法名雪郷清霜居士葬
南林寺塔中放光院

重國

八郎左衛門

元祿十二年己卯四月四日進上中紙始奉見太守綱
貴公奏者村田善太夫經智

國平

初忠金 次郎左衛門 惣兵衛 太郎

寶永三年丙戌十二月十三日別樹家國老種子島藏
人久時使御用人平田清左衛門純旨傳命為鍛冶造
刀劍學伯父忠清記銘薩摩國國平

刀匠傳諸書に曰く國平初銘忠金又包善と稱せり
と伯父忠清に造刀之術を学び後に丸田惣左衛門
正房之門に入れ里と

享保年中正清後被任安代後被任主馬首之兩人を俱し東
武に至り更に營に登り有司に見ゆ有司鍛造之術
を問ふ國平之に答ふ然れども造刀之命は不受
其作刀に延亨三年七十二歳と銘せる阿里

國

次郎右衛門

享保七年壬寅十二月十三日進上中紙始奉見太守
繼豊公

國

惣右衛門

享保十三年戊申七月朔日進上中紙始奉見太守繼
豊公

八郎左衛門

休齋

四郎左衛門

忠安

孝左衛門

不業鍛冶

天和三年癸亥三月三日死法名義山宗節居士

善長院

為國分郷士是枝善長院養子造刀劍

女子

市来吉右衛門妻

秀興

初忠重 主左衛門

天和三年癸亥十月十四日進上中紙始奉見太守綱
貴公奏者村田為左衛門経智

元禄二年己巳十月十四日受領和泉掾某年月改名
秀興初忠重之家世、連名用忠字而今所當為国家

諱故命避之因改曰秀興

享保十年己巳八月二十五日死法名大心玄道居士
一、刀匠傳諸書に曰く初銘秀興にて後忠重と改むと
又曰く初め和泉掾後和泉守を受領す津田越前守
助廣之門弟也と又初め谷山波平に住すと作刀に
波平住と銘せるあり

口宣案

上卿 甘露寺大納言

元禄二年十月十四日 宣旨

藤原秀興

宜任和泉掾

藏人右中辨藤輔長 奉

縦一尺一寸

一分

横一尺七寸

一分

女子

林市郎左衛門妻

女子

国分士鯨島氏妻

女子 国分士川邊氏妻

元貞

初忠寄 孝左衛門

元祿十二年己卯四月四日進上中紙始奉見大守吉

貴公奏者村田善太夫経智

寶永三年丙戌二月二十七日續祖父忠清從嗣国老

島津大藏久丘使御用人高橋七郎右衛門種敏傳命

同六年己丑十二月十八日進上中紙奉謝襲統奏者

仁禮仲右衛門頼常為鍛冶造刀劍記銘薩州住元貞

延享元年甲子七月十七日死法名即空鉄心居士

刀劍諸書に曰く丸田惣左衛門正房之門人也と

定岩了禪居士 寶曆十二年壬午四月廿九日

右元貞之弟か不詳 位牌有之

壽寶貞安大姉 寶曆八年戊寅五月四日

右元貞之妻か不詳 位牌有之

女子

正徳元年辛卯正月二十日生 宇都宮藤右衛門妻

元直

次郎兵衛

享保元年丙申八月十八日生

同十六年辛亥十二月十五日進上中紙始奉見大守

繼豊公奏者伊集院十蔵久達

延享元年甲子九月十三日賜襲統国老島津内膳久

兵使御用人三崎平太久退傳命

同年十二月十五日進納中紙奉謝襲統奏者仁禮仲

右衛門仲古

嗣父元貞業造刀劍記銘薩州住平元直

安永六年丁酉五月十八日死享年六十二法名正智

良因居士 葬于南林寺

元平

孝左衛門 幸左衛門 次郎兵衛

延享元年甲子十月晦日生

寶曆四年甲戌閏二月十五日進上中紙始奉見大守

重豪公奏者頼娃内膳久風

安永六年丁酉七月十一日賜襲統国老島津左中久

金使御用人高橋縫殿種英傳命

同年十月十五日進上中紙奉謝襲統奏者島津小平
太久金

嗣父元直業造刀劍天明五年有公命記銘薩藩臣與
元平

寛政元年己酉十二月朔日受領大和守

同二年庚戌正月十一日有公命被免朝臣之二字記

銘大和守平朝臣元平国老島津石見久邦使御用人

伊集院隼人久命傳命

文政九年丙戌七月十三日死八十三歳

法號泰翁院鉄光劍居士 葬于南林寺

平朝臣元平

從二位行權大納言藤原朝臣經遠

宣奉 敕件人宣令任

大和守者

寛政元年十二月一日

大外記兼助敕原朝師資奉

縦 一十三分
横 一尺
九分二釐

口宣案

上卿 勸修寺大納言

寛政元年十二月一日 宣旨

平元平

宣任大和守

藏人頭右中辨藤原良直華

縦 一十三分
横 一尺
七分五釐

元平之作刀三口々與大和守平朝臣元平與弟元武元安造之
勢日置兼淨送文化七年秋 蓋シ元平ノ姉或ハ妹ノ嫁シタ
ル先ニ日置氏アリシナルベシ

元武

正左衛門 為元通之養子

嗣父業造刀劍

元安

次郎右衛門 入道称壽安入道

嗣父業造刀劍

元寛

六郎

嗣父業造刀劍

女子 奥州會津侯臣角大八元興之妻

享和元年辛酉九月十二日死法名釋尼妙圓大姉

元興初稱秀国就水心子正秀習得造刀之術寛政四年春到薩州而入奥元平之門学相州傳之造刀法翌年業成帰国仕會津侯俸米七石五人扶持弟子扶持十五人文化七年三月廿八日歿年七十一法名高國院釋元興居士葬于會津若松浄光寺生一子曰大治寛政六年甲寅誕生文政二年乙丑十月廿五日歿年二十六不業刀工其子大助明治廿四年三月十二日歿年八十

女子 業師町丸田氏_二嫁_ス

女子 常盤町野津氏_二嫁_ス 後離別

文政十年丁亥四月廿九日誕生

明治廿年丁亥七月三日歿 六十一歳

元平

次郎兵衛

天保四年癸巳二月三日誕生

生母ギン

天保十四年癸卯正月十八日相續

明治三十三年庚子五月三十一日北海道_{ヨリ}転籍

明治三十八年乙巳十一月廿一日歿年七十三

法名釋起行位

清右衛門

原田氏養子 墓碑在南林寺後改葬

女子

生母黒田仲左衛門之三女スナ_三弘化二年乙巳九月三日誕生

女子

フヂ

慶應三年丁卯八月九日誕生生母同前

肝属郡新城村_{三六一番戸}一士族海老原正九郎_二嫁_ス

女子 チヨ

女子 キク

元清

女子

富佐子

女子

茂子

元通

六郎兵衛

享保六年辛丑四月廿四日誕生

元文二年丁巳五月廿八日進上中紙始奉見太守繼

豐公奏者伊勢兵部貞起

寶曆三年癸酉九月十一日別樹家

天明二年壬寅七月廿九日死年六十二

法名實山了説居士

正之進 寛政二年 戊 十月一日

月山了江大姉 寛政十年 午 三月十八日

右位牌有之續柄不詳

元武

正左衛門

寛延元年戊辰十月九日誕生

寶曆十年庚辰五月廿八日進上中紙始奉見太守重

豪公奏者畠山數馬 明和五年戊子十一月廿八日

別樹家

天明二年壬寅八月十八日續伯父元通後嗣国老島

津仲久智使御用人鹿島邊國富傳命

文化十三年丙子十月廿四日死 六十九歳

法名青雲良翁居士

女子

女子

元房

武右衛門

寛政二年庚戌四月三日誕生

享和三年癸亥八月廿五日於敷舞臺進納中紙謁奏

者番末川主膳久満平田掃部正純行初見公禮

文化十四年丁丑正月廿五日賜襲統国老島津安房

久備使御用人末川將監久満傳命

同年四月廿五日於敷舞臺進納中紙謁奏者番北郷

七郎左衛門久央鎌田源左衛門政甫賜襲統行禮

弘化五年戊申五月四日歿年五十九

元珍

七郎

寛政八年乙辰二月廿七日誕生

文化二年乙丑八月十五日進上中紙始奉見太守齋

宣公奏者島津藤次郎久藏

女子

嫁菱刈氏生一女無男子乃迎某氏續家然又生
一女名シ於是以黒田氏之男為家督

女子

嫁坂元氏大正年中下荒田塩濱居住生一女無男子以某氏
為家督又有一女無男而迎某氏續家如菱刈氏

元武

正左衛門 初元長後改元武

文政四年辛巳十二月八日誕生生母文久元年辛酉

四月四日歿

始水上坂下居住後移于比志島不業治工

明治廿二年己丑正月十八日歿於比志島年六十九

一、明治以前比志嶋ニ移住同地ニ於て歿す埋葬亦同地然るに
其後家族再び鹿兒嶋に住するに及び大正年中改葬之為同
地に至るも既に其所在不詳 於是同墓地之土を持帰り草
牟田丸山誓光寺に葬り石塔相建申候

熊岫 天保十五年 二月九日

直助元貞 文久二年 十二月十日
右位牌有之續柄今不詳

某

歳一郎 草牟田土河野氏養子

女子 不詳

女子

エイ

慶應元年乙丑五月十日誕生

生母上之園町住士新納太右衛門女清天保九年戊戌二月八日

誕生明治四十五年壬子一月九日歿於玉里年七十

五葬于草牟田丸山誓光寺
嫁于兒玉喜次郎

(以下略)

某

友次郎

實重

盛彦

博

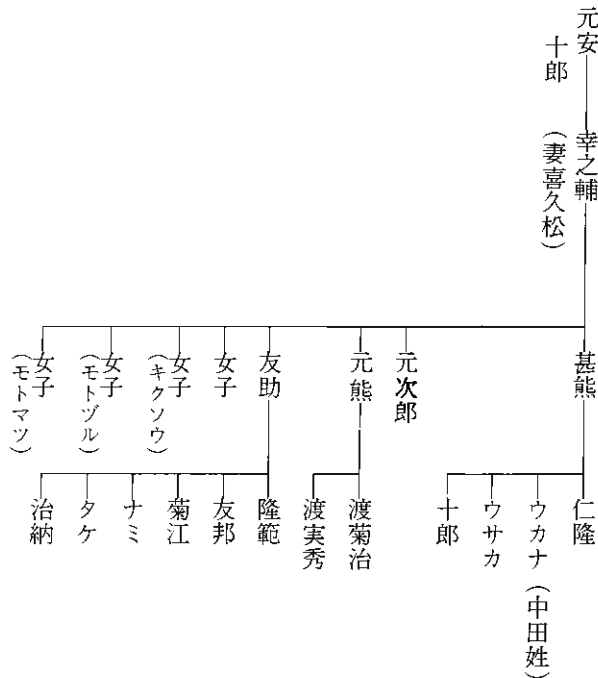
博隆

次に二代元安のことであるが、系譜では大和守元平の弟として元武、元安があり、元武については伯父元通の養子となり系譜に詳しいが、元安については簡単な説明しかなく、元安の子すなわち二代元安については、何らふれていない。元安については、前系譜のとおり次郎右衛門、嗣父業造刀剣と記述があり、入道称壽安入道との書き込みがある。しかし新刀銘集録や福永酔剣氏等の研究により、元安には元光と銘を切る子があり、やがてこの元光が元安を名乗り二代元安となることが明らかにされている。

また、二代元安には「大島住」と銘を切る作品が残っていることから調査を進めていたところ、現大島郡竜郷町秋名にその子孫が現存されており、元安の墓もあることが判明した。二代元安が、なぜ奄美大島の地で作刀するようになったかは不明であるが、鹿児島城下で何らかの不都合な事件を起し、この地に追いやられたのではないかと考えられ、そのように伝えられている。

二代元安は、通称を奥十郎といい、その子には幸之輔（大正年間歿）

があり、この子孫の方々が跡を継いでおられる。竜郷町教育委員会において願って調査した略系図は、次のとおりである。



二代元安の墓は、竜郷町幾里の墓地にあり、山川石製で正面に「鹿児鳴縣土族奥平元安」、右側面に「明治七年戊八月六日」、左側面に「行年八十二歳」とあり、台石には奥家の家紋である「扇面三地紙紋」が彫ってある。この墓碑によって二代元安は、寛政五（一七九三）年生まれで、明治七（一八七四）年八月六日、八十二歳で歿したことが明らかとなった。



ここで、二代元安誕生以降、元安関係の刀剣にある銘文を、前述の特
別展出品作や出版物の押形、さらに坂元盛愛氏のまとめておられた銘文
等からまとめてみると次のようになる。



二代元安の墓碑及び正面の碑文・家紋

(年令は、二代元安のものである)

寛政五(一七九三)年 1歳 二代元安誕生

六(一七九四)年 2歳 薩陽士與元安(初代元安)

寛政六寅春

九(一七九七)年 5歳 薩陽士與元安(初代)

寛政九己巳春

與大和守平朝臣元平與弟元安造之

寛政九巳秋(初代)

十(一七九八)年 6歳 薩陽士元安(初代)

寛政十年六月……

與大和守平朝臣元平與弟元武元安造之

寛政十年秋(初代)

與大和守平朝臣元平(初代)

寛政十年秋弟元安以相錘鍛之

十一(一七九九)年 7歳 與大和守平朝臣元平與弟元安造之

東郷長左衛門為平實友鍛之嵐

寛政十一未十二月二十六日(初代)

薩陽士元安(初代)

寛政十一年未春

享和二(一八〇二)年 10歳 薩陽士與元安(初代)

享和二戌二月

三(一八〇三)年 11歳 與大和守平朝臣元平與弟元安造之

享和三癸亥秋(初代)

文化元(一八〇四)年 12歳 薩陽士元安(初代)

文化元子春

二(一八〇五)年 13歳 薩陽士與元安(初代)

文化二丑春

五(一八〇八)年 16歳 薩陽士與右衛門平元安(初代)

伊藤傳右衛門藤原祐尚應望

文化五戊辰八月吉日作之

七(一八一〇)年 18歳 與大和守平朝臣元平與弟元武

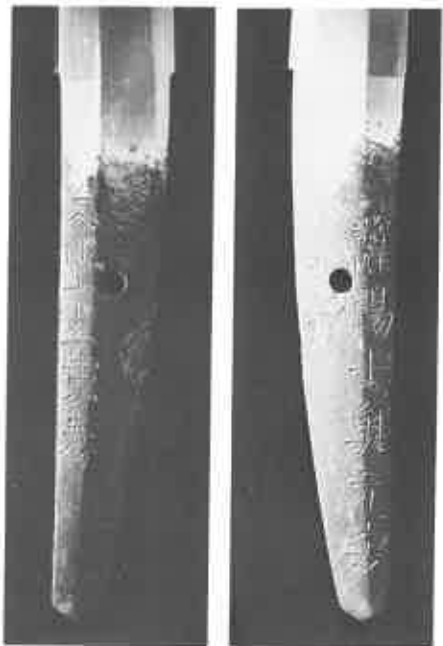
元安造之甥日置兼淨送(初代)

文化七年秋

十三(一八一六)年 24歳 元武、十月二十四日歿、六十九歳

文政元(一八一八)年 26歳 薩陽士與元安(初代、前出)

文化十五寅春



文政四（一八二二）年 29歳 薩陽士奥平元光（二代元安）

文政四巳二月日

六（一八三三）年 31歳 薩陽士奥平元光行年三十一歳（二代）

彫物刀 武運長久萬億歳

于時文政六未陽中大吉日造之

九（一八二六）年 34歳 元平、七月十三日歿、八十三歳

十（一八二七）年 35歳 奥元安七十歳造（初代）

文政十い二月

薩州住奥元安（初代）

文政十亥春

安政三（一八五六）年 64歳 於大島薩陽士奥平元安六十四歳（二代）

安政三五月五日

於大島奥平元安六十四歳作（二代）

安政三年五月吉

四（一八五七）年 65歳 大龍山住奥元安六十五歳作（二代）

薩州奥元平揚之

六（一八五九）年 67歳 大龍山住奥元安六十七歳作（二代）



文久三（一八六三）年 71歳 奥壽安入道平元安七十歳作（二代）

明治元（一八六八）年 76歳 於大龍山奥壽安入道平元安 七十六歳

作之（二代、前出）

武運長久

戊辰三月吉日



四（一八七二）年 79歳 大龍山住奥壽安入道平元安七十九歳作

明治四年辛未九月吉日

（握り鉢にある銘）

七（一八七四）年 82歳 二代元安、八月六日歿、八十二歳

このほか、年紀銘はなく「薩陽士奥元光」と銘のある短刀（前出）がある。





握り 鋏

これらの作品の年紀及び製作時の年令は、二代元安の墓碑にある歿年、行年から逆算しても完全に合致する。これらの作品群を見て気づくことは、初代元安はわずかの例外を除いて銘文に平姓を切らず、逆に二代元安は、そのほとんどに平姓を切っているようである。

ここで、二代元安が竜郷に渡った時期であるが、現地では安政年間の初め頃、その子幸之輔を連れて来たと伝わっているようである。確かに

安政三年（元安六十四歳）銘で大島での作品が残っているが、これだけで時期を決定するのは早計であろう。文政六年（元安三十一歳）までは薩陽土奥平元光と銘を切っているので、この頃までは鹿児島城下にいたのである。この時期の幅をもう少しつめるには、今後とも新資料の発掘に努めなければならないと思う。

また、二代元安の鍛冶場跡は、現在も残っており、竜郷町秋名から南へ約五キロメートル、本茶峠に通じる林道の秋名川沿いにある。鍛冶場の現状は、石垣が残っている程度で、周囲は深い自然林におおわれ、雑木や竹が生い茂っており、平地もわずかで、鍛冶場を思いおこすようなものは何もない。この石垣の大きさは、七メートル×四メートル、高さ五〇センチメートル程度あり、川石を積んだもので、おそらく小屋組みの基礎部分をなしていたものであろうと思われる。この部分がまちがいに鍛冶場であったと証明するには、今後発掘調査等が必要であろうが、付近の人々は神域として恐れ、この場所には足を踏み入れないそうである。この石垣のすぐ下には、秋名川から水を引いたと思われる溝状の地形を確認することができる。もちろん周囲には人家もなく、なぜこのような辺鄙な場所に鍛冶場を作ったか、まったく不明である。しかし、鍛冶に必要な良質の水は、秋名川の清流からふんだんに得られたであろう。十郎元安は、住居のあった秋名からこの鍛冶場に馬に乗って通ったと伝えられている。

また、刀銘に見られる「大龍山」は、この付近の山を「大龍山」（現地の人々は、フウゴモリと言う）と呼ぶところから、おそらくこの「龍」を「龍」と読みかえたものと思われる。



秋名川からの導水路跡



鍛冶場跡のようす



二代元安の鍛冶場の位置 (地形図は竜郷町提供)

以上、奥氏の系譜を紹介し、二代元安の存在を明らかにしたが、資料不足、時間不足もあり、消化不良の感はまぬがれないが、今後の研究の一助にでもなれば幸いである。

最後に、二代元安については、その生歿年、作品等もある程度明らかになったが、逆に元平の末弟すなわち初代元安の詳細が不明である。しかし、前述の作品の中にあつた「奥元安 七十歳造、文政十^一二月」の銘文から考えると、初代元安は宝暦八（一七五八）年に誕生したことになるが、さらに詳しいことはこのように年紀銘があり、年令を切った作品や文書資料等の出現を期待しなければならない。

この小論を終えるにあたり、各種資料の提供、御指導をいただいた坂元盛愛氏並びに調査に御協力いただいた竜郷町教育委員会星村文雄氏及び中田一男氏に感謝申し上げます。